
赤い帽子

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

赤い帽子

【Nコード】

N6023D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

スコットランドグラスゴー近郊のある街で連続殺人事件が起こっていた。果たしてその犯人は。怪奇ミステリーです。

第一章

赤い帽子

スコットランドグラスゴー近辺の街。この街は今スコットランドはおろかイギリス中の注目を浴びていた。本来ならば然程知られることのないこの街がだ。

「まるでビートルズが生まれたいだいな」

街の老人は今のこの街の有名なことをこう皮肉めいて語る。実際に今この街には観光客がひっきりなしに訪れてあれこれと動き回っている。

ところがこの観光客が問題なのだ。この街には特に観光になるようなものはない。スコットランドと言えばネス湖だのそこに棲むと言われている謎の怪獣だのが言われているが実際のところこの街にはそうした話もない。街に怪獣が出ればそれだけで大騒ぎだがそんなこともないのだ。

では何故有名なのか。ビートルズがいるわけでもネッシーがいるわけでもない。例えて言うならばジェヴォダンの野獣が出て来たのである。よりによって一番出て欲しくはないものがだ。

「今日もまた一人だ」

警察署で署長がしかめっ面で周りの者に述べていた。

「また一人。これで」

「十人ですな」

白髪頭で痩せた身体の副署長が署長に答えた。彼も非常に面白くなさそうな顔をしている。彼等は今署内に設けた捜査室において話をしていた。そう、今この街は連続殺人事件で有名なのだ。

「今度は頭を叩き割られています」

「また斧でか」

「はい、その通りです」

副署長はあらためて署長に述べた。それを聞いた署長の顔にある

黒い口髭が不満げに震えた。不愉快であるのがそれだけではつきりとわかる。

「一撃だったようです」

「即死だったということか」

「事件現場は血で染まっていました」

副署長は事件現場においても言及する。

「いつも通り血の海でした」

「それで被害者は」

「マデリーン・アッテンボロー」

女性であるらしい。

「年齢は二十二歳、大学生でした」

「若いな。悲しい話だ」

「はい。彼氏とのデートの帰りだったそうです。その帰り道に」

「頭を斧でか。完全に猟奇殺人事件だな」

「しかも連続です」

副署長はまた言う。

「これで十人。立て続けにです」

「忌々しい。何が楽しくて人を殺していくのか」

署長は口をへの字にさせ腕を組んだ。そのうえで忌々しげに言うのであった。

「どうみても同じ犯人だな」

「事件で使われている断面を見れば」

被害者はどれも鋭利で重い刃物で切られている。だからこれは間違いがなかった。

「そうとしか思えません」

「斧でか。快樂殺人か？」

「あまり考えたくはないですが」

副署長の顔が曇る。昔から殺りたいから殺すという異常な心理の人間はいるものだが実際にそれに関わると暗鬱な気持ちになさざざるを得ない。この時の彼等がまさにそれであった。

「おそらくは。そうではないかと」

「証拠もないのだな」

「それだけです」

斧で切られたということだけであった。

「斧ということ以外には」

「それではだ。その斧を調べよう」

署長は腕を組んだままこう提案してきた。

「それで何かわかる筈だが。もう調べたか？」

「はい」

ここでそれまで黙っていた署長と副署長以外のスタッフのうちの一人が応えてきた。黒に近いダークブラウンの髪を丁寧後ろに撫でつけやや痩せた整った顔を持つ若い男であった。その目からは灰色の二つの光を放っている。白い理系の研究服をスーツの上から着ている。

「斧については調べ終わりました」

「そうか」

署長はそれを聞いてまずは頷いた。

「それで何かわかったか？」

「かなり古い斧です」

彼は斧についてこう答えてきた。低いバリトンの声であった。

「それも中世の頃の」

「中世の！？」

それを聞いて署長だけでなく他の面々も思わず顔を顰めさせた。

「中世の斧か」

「はい、被害者の傷口に付着していた錆等を調べるとそうでした」

「そうなのか。何か余計にわからなくなっただな」

署長はそこまで聞いて首を捻った。

「中世の斧か」

「しかもです」

白衣の男はさらに言う。

「その斧には別のものも付着していました」
「ほう」

署長も副署長もそれを聞いて思わず声をあげた。新たな証拠かと期待したのである。

「それは一体何かね」

「血です」

白衣の男はこう二人に答えた。

「血か」

「その数は尋常なものではありませんでした」

彼はそう二人だけでなく周りにいるほかのスタッフにも語った。

「十人ではききません」

「何っ!?!」

「では他にも発見されていない犠牲者がいるのか」

二人も周りもそれを聞いて気色ばむ。だが彼が語るのは彼等のその危惧をさらに上回るものであった。

「千人、もつといくでしょうか」

「それはないだろう」

「幾ら何でも」

誰もがそれを聞いて一笑に伏そうとする。しかし彼の言葉はそれを許さなかった。

「それがですね」

「そこにも何かあるのか」

「あります。その血ですが」

彼は話しはじめた。それは驚くべきことであった。

「千年前のものからはじまっています」

「千年前のものからか」

「はい、それだけ長い間使われてきたものです」

そう述べる。署長達はそれを聞いてあらためて顔を顰めさせた。

「しかも人を殺める為だけに」

「そうして千人か。千年で」

「長い間使われなかった時期もあります」
彼は続いてこう述べた。

「百年程度ですが。それは最近までです」
「それではだ」

署長はここまで聞いて彼にまた問うた。

「この辺りからか。また使われだしたのは」
「そうです。しかも力の入れ加減によって」

また話される。その内容にしても奇怪なものであった。

「わかったことですが全て同じ者によるものです」

「話がわからないな」

副署長はここまで聞いて首を捻るしかなかった。彼にしてみれば今聞いていることはまるで幻想の世界の中での話であったのだ。

「千年前から同じ人間によって殺されたというのか。しかも千人も」
「傷跡はそう教えています」

白衣の男はここでも冷静であった。まるで事実を全てそのまま受け入れているかのようにであった。

「そのように」

「同じ者の犯行というのは信じられない」

署長はここでそれは否定した。それだけはとても信じられなかったのだ。

「しかしだ」

「はい」

白衣の男はそれに応える。

「千人の犠牲者が千年の間あったというのは信じよう。だとすると」
「何か得体の知れない話になってきましたね」

副署長はそう言ってまた眉を顰めさせた。

「まさかとは思いますが古くから残っているカルト教団何かでは」
「その可能性は否定出来ない。一度よく調べてみるか」

「それですが」

白衣の男がまた名乗り出てきた。

「私にお任せさせて頂きたいのですが」

「君が何がいるのか調べるといふのか」

「その通りです」

署長に対して静かに述べる。

「それで御願ひします」

「どうぞされますか、署長」

副署長は彼が名乗り出たのを見て彼に問うた。

「ここは彼に任せますか？それとも」

「一つ聞きたい」

署長はここで怪訝な顔でまずは白衣の男に問うのであった。

第二章

「何でしょうか」

「君はこの事件の犯人がわかっているのかね」

「おおよそのところは」

やはりここでも冷静に言葉を返してきたのだった。

「察しがついております」

「そうなのか」

「はい」

まるで何ともないといった感じだった。署長はそこに彼の自信を感じたがそれ以上に何か得体の知れない不気味なものも感じたのであった。丁度この事件のようになだ。

「すぐに犯人を断定し事件を解決させてみせます」

「わかった」

署長はそこまで聞いて断を下した。そうして彼に言うのだった。

「それでは君に任せよう。ただ」

「ただ？」

署長としても事件を解決させなければならない。ここには警察官としての責任感と事件が起こり続けることでの報道によって自らがパッシングを受けることを恐れたのと二つの理由があった。彼としては事件に対して保健をかける必要があったのである。

「君はあくまで個人で動いてくれ給え」

「私個人ですか」

「そつだ。捜査チームはそのまま捜査を続ける」

彼を別働隊としたのである。流石に彼に全て一任するわけにはいかなかったのだ。

「それでいいなら任せるが」

「それではそれで構いません」

白衣の男はそれを受けて平然として述べた。それはまるでそもそ

も彼には感情といったものがないかのような言葉の返しであった。

「では私はこれで」

「それでいいのだな」

「ええ」

念を押す署長にもそう答えるだけであった。

「事件が解決すればそれに越したことはありません」

「そうか。それなら」

「はい。では」

そこまで言うつとすつと席を立つのであった。

「私はこれで。早速捜査に取り掛かります」

「おい、もうなのか」

あまりにも性急かつ無愛想な様子に副署長は思わず声をあげた。

「幾ら何でもそれは」

「いや、いい」

だが署長が副署長を制止した。彼にも思うところがあるようであった。

「今言ったままでだ。彼がやることには口を出さない」

「左様ですか」

「うむ、それでは頼むぞ」

「わかりました」

男はそのまますつと部屋を後にした。誰もがその様子に目を顰めさせているが全く気にはしていないようであった。副署長はそんな彼を見てまだ口の中であれこれと言つのであった。

「一体全体。何を考えているのか」

「彼には彼の考えがあるのだろう」

しかし署長はそれでも彼を庇うのであった。

「ここは任せておけ」

「しかしですね」

それでも生真面目な副署長はまだ不満を露わにさせていた。

「あの態度はあまりにも」

「確かに好ましいものではない」

それは署長も同じものを感じていた。

「しかしだ。あえて単独行動を許している」

「彼の能力を信じてですか」

「正直あそこまで僅かの間調べあげたのは凄いことだ」

彼はそれは正当に評価していたのだ。そうしたもの認められるということでの署長もただ署長になったのではないことがわかる。

「だとしたらその力に賭けてみよう」

「左様ですか」

「そうだ。我々は我々でやる」

そのうえでまた言う。

「それでいいな」

「わかりました。それでは」

これで副署長も納得した。署長はそんな彼の顔を見ながらまた言う。

「それにしても。確かに奇怪な事件だな」

「そうですね。おそらくはただの通り魔ではありません」

それは副署長もわかった。そう捉えるにはあまりにも不可思議だからだ。そもそもそれだけ古い斧を俠気に使うということが不可思議であった。

「何でしょう、すると」

「それも調べていこう。彼はそれもわかっているようだがな」

「おかしな話ですがね」

副署長にしてみればそうであった。

「千年前からだの何なのと。有り得ないことです」

「人ならばな」

署長は何故かここでふと異形の存在の気配を感じた。

「そうなるが」

そう呟くのであった。白衣の男は彼等がそんな話をしている間にもう自室に戻っていた。そこは署内にある研究室であった。様々な

解剖の標本やフラスコ、実験に関する本や解剖結果の写真等がある。事件現場や犯行現場の写真ファイルもある。そうした極めて不気味な雰囲気の部屋の中に一人で入っているのであった。

「さて」

彼は自分の机に座った。その上には一冊の本があった。

「私の考えが正しければ」

見ればそれは古い本である。少なくとも医学や犯罪に関するものではない。彼はそれをゆっくりと開いたのである。

それだけで埃が起こる。紙ではなく布か何かの本であった。それだけでかなり古い本であるのがわかる。所々破れたり虫食いまである。

第三章

その本を開いてあるページを開いた。そこにはかなり古い手書きの文字で色々と書かれていた。時折その読みにくさに顔を顰めながらも読み解いていく。

「やはりこれか」

読みながらふと呟いた。

「これならばやはり」

何かがわかったようであった。彼はその日はそのままずっと部屋にこもったままであった。そうしてその翌日。またしても事件が起こったのであった。

今度の事件もまた街中であった。今度は深夜の路上で浮浪者が殺された。背中から例の斧でざっくりとやられてしまっていた。やはり即死であった。

「これで十一人か」10

早朝まだ人も車もない事件現場に捜査スタッフの殆どが集まっていた。その中には署長もいる。彼は被害者が血の海の中につつ伏せに倒れているのを見て忌々しげに呟いた。

「しかも昨日の今日でだ」

「そうですね」

そこにいた白衣の男は平然とした様子で署長の言葉に応えた。

「やはり起きました」

「やはりか」

「はい」

やはりそのままの態度での返事だった。

「しかも事故現場も予想通りでした」

「事故現場もか」

「ここは過去交通事故が起こっていますね」

「う、うむ」

副署長は男の言葉に驚いた顔をして答えた。

「その通りだ。しかしそれをどうして」

「調べさせて頂きました」

「ここでも味気ない返答であった。」

「犠牲者が出てその血で真っ赤に染まったと」

「その通りだ。そこまで知っているのか」

「過去の十件の殺人事件についても調べました」

男はそれについても言及してきた。

「そこでは全て過去に事故や事件があり人が死んだ場所でした」

「そうだったのか」

署長はそれを聞いて目を顰めさせた。これには気付いていなかったのだ。

「まさかとは思っていたが」

「そういえばそうでした」

副署長も白衣の男の言葉にようやく気付いたといった感じであった。彼はこの署にいてかなり長い為元々そうした知識も持っていたのである。だが今回の事件のことばかり頭にありそのことを忘れてしまっていたのだ。白衣の男がそれを思い出せたのである。

「確かに。それ等全ての事故や事件では」

「犠牲者が血塗れになって死んでいます」

男はこう述べた。

「そして今回の連続殺人事件でも」

「同じように血の海の中で人が死んでいるな」

署長もそこまで聞いて言う。

「では犯人はそれをなぞっているというのか」

「いえ、そうではないでしょう」

だが男は署長のその言葉を否定した。

「むしろ誘われているのです」

「誘われている!?!」

「そうです、血に」

そしてこう言うのだった。

「それで事件を起こしているのです。犠牲者はこの場合は誰でもいいのです」

「そうだったのか」

「そうです。そして」

男はまた言う。

「次でおそらく事件は解決するでしょう」

「次でか」

「殺害現場が特定されますので」

男は冷徹な声でまた述べた。

「次で終わりです」

「ではどうするのだ？」

「お任せ下さい」

昨日と同じ言葉であった。

「私に」

「そうか。ではまた考えがあるのだな」

「その通りです。今夜に全ては終わります」

「ここまで言うのであった。」

「私が終わらせますので」

「わかった。それではだ」

「ここで署長は言う。」

「それも任せたい。いいな」

「署長」

副署長は今の署長の言葉に眉を顰めさせて問う。

「宜しいのですか、それで」

「事件の解決をか」

「はい、彼は医者です」

そういう触れ込みである。これは副署長だけでなく署長も知っていた。だからこそ副署長は彼にそれを確かめるように問うたのである。

「それで事件の解決までとは」

「ですが。私はできません」

しかし目の前でそう言われても彼の自信は変わらないのだった。
「必ずや」

「できなかつたらどうするのかね？」

副署長は怪訝な顔で彼に問う。

「相手は間違いなく凶悪な殺人鬼だ。その相手なぞ」

「既にその為の用意もしておりますので」

それでも彼は返事を変えない。

「何の心配もいりません」

「君が殺される危険もあるのにか」

「確かにそれはあります」

これについては彼も認めるところであった。だがそれでもその口調はいつもと変わりはない。あくまで淡々として感情に乏しいものであった。

「ですがその危険もまた」

「君のその備えで何も無いのだね？」

「その通りです。ですから」

「わかった。そこまで言うのならいい」

副署長もこれで根負けした。遂に彼の言葉を認めたのである。

「君に任せよう。それでいいな」

「それで御願います」

「署長、私から言うことはもうありません」

ここまで述べたうえで署長にも告げるのだった。

第四章

「彼に任せましょう」

「うむ。しかしだ」

署長は全てを男に任せたうえで言ってきた。

「今夜わしも一緒に行つていいか」

「はい」

彼はその言葉に頷いた。

「それではそれで御願います」

「君がどうやって事件を解決するのか。見てみたくなった」

これは好奇心からである。それを抑えることができなくなつていたのだ。

「だからだ。それでいいな」

「はい、どうぞ」

彼は表情を変えないまま応える。

「それで御願います」

「私もそれでいいか」

意外にも副署長も名乗り出て来た。

「君もか」

「既に多くの犠牲者が出ています」

彼はとりあえずは警察官であろうつとしていた。好奇心があることはそれで否定していた。もっともそれは署長から見れば下手な演技でしかなかったが。

「その犯人が誰か見ておきたいのです」

「ふむ。では君もだな」

「はい」

署長の言葉にこくりと頷く。

「それで御願います」

「わかった。では三人だ」

こうしてメンバーが決まった。署長はあらためて男に告げた。

「それでいいな。そして場所は何処だ？」

「駅です」

男は一言で告げた。

「そこです」

「そうか」

副署長は駅と聞いてすぐに何かを察した。そこは。

「一年前飛び込み自殺があったな」

「はい、そこに行けば必ず」

「犯人が来るというのだな」

「そうです。だからこそ」

「よし、わかった」

署長もそこまで聞いた上で頷いてきた。

「では今夜駅に行こう、いいな」

「はい、それでは」

こうして三人はその夜駅に行くことになった。閉鎖されていたが特別に警察の権限で入れてもらった。そこは大きめの駅だったが今は三人の他は誰もおらず静まり返っていた。赤い壁も暗闇の中に沈み線路にも電車も何もない。階段も汚れすら見えず黒いプラットフォームも白い点線も誰もおらず非常に殺風景なものであった。三人はその殺風景な世界の中を歩いていった。署長はその中で男に対して問うのであった。

「ここでいいのだな」

「場所も時間もそうです」

これでいいと述べてきた。

「もうすぐ来るでしょう」

「犯人は一体何者なのだ？」

副署長は暗闇の中の駅を見回しながら怪訝な声で呟いた。

「わざわざこんなところに来るとは一体」

「私の予想ならば」

男は副署長のその眩きに応えて述べる。

「人間ではありません」

「ではあれか」

署長はそれを聞いて彼に言う。

「千年がどうかというのは」

「そうです。だからこそです」

署長のその言葉にも答えた。

「間違いなく人間ではありません。それも」

「それも!？」

「かなり凶悪な相手です。ですが」

「もうこちらの手は用意してあるというのだね」

「その通りです。ですから御安心下さい」

副署長にも答える。

「それにわかりませんか？」

「何がだね」

「今にも来ますよ、その相手が」

彼は周囲を見ることなく述べてきた。

「もうすぐ」

「何故そう言えるのかね、また急に」

「気配です」

男の返答はこうであった。

「気配が。この殺気に満ちた気配が何よりの証拠です」

「そつえばだ」

署長はその言葉に応えるかのようにふと怪訝な顔になった。それと共に顔を顰めさせて言うのであった。

「何か急に生臭くなってきたな」

「確かに」

副署長もここで気付いた。

「この匂いは。血ですか」

「それが何よりの証拠です」

男は副署長の言葉に頷くと共に懐に手を入れた。

「来ます。そう」

剣呑な鋭い声で言う。

「今にも」

「今にも」

「ええ、ほら」

男の目が鋭くなっていた。彼は明らかに何かを感じていた。そうしてその感じた先をその鋭くなった目で見ている。そこにいるのがわかつているかのようには。

「伏せて下さい」

署長と副署長に対して告げた。

「すぐに。いいですね」

「!?!?うむ」

「わかった」

二人はそれに頷くとすぐに伏せた。それと共に二人の頭の上を何が通り過ぎた。

「今のは一体!?!」

「何なのかね」

「その犯人です」

男だけが立っていた。どうやら今では彼は何ともないようであった。その証拠に二人の上から聞こえる声は確かなものであった。

「やはりここで来ましたか」

「今のがか」

「はい」

署長の言葉に応える。

「詳しいことは後で。また来ます」

そう言うつと懐に入れていた手を取り出した。そこには銃があった。

「これで。終わらせます」

「拳銃でかね」

「ただの拳銃ではありません」

伏せたままの副署長に答える。見れば彼も署長も伏せながら拳銃を構えている。警官だけあってどんな時でも用心は怠ってはいなかった。

「この時の為にあえて持って来たものです」

「犯人を倒す為にか」

「そうです。また来ます」

今度は署長にも副署長にもわかった。あまりにもはっきりとした殺気であったからだ。

「来るな」

「そうですね」

副署長は署長の言葉に伏せたまま頷いた。

「間違いなく」

「ですがこれで終わりです」

男は今の状況においてもまだ冷静であった。

「これで。今度で」

「そうか、では頼むぞ」

「はい」

署長の言葉に応える。

「来た時に。これで」

「来たぞっ」

副署長は気配だけを感じて告げた。彼にもはっきりとわかる程の強い殺気がした。それが何よりの証拠であった。

第五章

「はい、それでは」

何かが男に迫る。男はその何かに対して拳銃を構える。そして。その引き金を引いたのであった。

引き金が引かれた次の瞬間から時間が止まった。銃弾はそのまま前に進み前から彼に襲い掛かる何かの額に吸い込まれていく。そうしてその額にゆっくりとめり込み中に入る。入ったその穴から血が出るがその瞬間にはもう銃弾は頭を突き抜けていた。そうしてプラットホームの壁に当たりそこに割れ目を周囲に張り巡らせた穴を開ける。それができたその瞬間には額を撃ち抜かれた何かはプラットホームの上に倒れ込んでいた。これで全ては終わりであった。

「これでよし」

撃ち終えた男は静かに語る。拳銃の銃口からは白い煙が出ていた。闇夜の駅の中に白い煙が映えていた。

「終わりました」

「今のでだな」

「はい」

そう署長に述べる。

「犯人は死にました、これで」

「では事件は終わりだな」

署長はまずそれを問うたのだった。

「これでやっと」

「はい、ですが署長」

そのうえで彼は署長に告げるのだった。

「犯人を御覧下さい」

「うむ、そうだったな」

「それだ」

副署長も言う。二人は起き上がりながら言葉を出す。少し伏せて

いたので制服のあちこちに汚れがついていたがそれは気にはしなかった。

「一体何者なのだ」

「十一人、いやひよっとしたらそれより多くの人間を殺してきたのは」

「彼です」

男は起き上がった署長と副署長に対して述べた。述べながら目の前に倒れ伏している軀を指差すのであった。その軀とは。

「何だ、これは」

「これは一体」

二人はその軀を見て思わず目を顰めさせた。そうせざるを得ないものがその軀にはあったからだ。

特徴的なのは二つあった。その服装もまたやけに古めかしく少なくとも今の服ではなかったがそれよりも特徴的だったのはまず手に持っている斧と頭にある赤い帽子だ。特にその赤い帽子はやけに真っ赤でしかも剣呑で残酷な雰囲気さえ漂わせているものであったのだ。

顔はしわがれた老人のものであったが口からは牙がのぞいている。目は赤く光こそなかったが鋭く邪悪なものを漂わせていた。皺だらけの手の爪は禍々しく伸びている。そうしたことを見ていくとこの軀が人間のものとはとても思えなかった。

「レッドキャップです」

男はここでこう言った。

「これはレッドキャップです」

「レッドキャップだと」

「はい、古くから伝わる妖精の一種です」

彼はそう署長と副署長に述べてきた。

「昔からいます。何分残忍な奴です」

「残忍となるとやはり」

「そうです、これまでの事件はこいつの仕業です」

署長に対して述べた。

「この斧で殺していたのです」

「そうだったのか。これでか」

「この斧で」

二人は男の話を聞いて納得してレッドキャップの斧を見た。見れば刃のところが赤く染まっている。その赤が何であるのかはもう言うまでもなかった。

「長い間多くの人を殺してきました」

男はまたレッドキャップについて語る。

「それもかなり」

「千年の間だな」

「そうですね。それは妖精だからできたのです」

また署長に対して述べる。

「それだけの長い間人を殺してきたのは。だからなのです」

「そうだったのか。それでか」

「人を殺すのは何人だけとは限りません」

そしてここまで話したうえでこう述べた。

「他の存在もまたその中に入ります。こうした妖精でさえも」

「わかった。今それがようやくわかった」

署長は忌々しげでかつ恐れる顔で言葉を返した。

「だからか。今まで犯人が碌にわからなかったのは」

「その通りです。人が相手ならば見つけるのは容易です」

実際にはそうとは限らないが少なくとも人ならざるものに比べればましである。彼はそれを踏まえて今署長に対して話をしていた。

「ですがそれでも見つける方法がないわけではなく」

「それで君は独自で捜査を進めていたのか」

「その通りです。上手くいって何よりです」

「それでだ」

署長はここで別の質問を彼にしてきた。

「何でしょうか」

「君が用意していた切り札だが」

「あの拳銃ですか」

「そうだ。あれは一体何だったのだ？」

次に問うたのはそこであつた。

「妖精を一撃で倒したが。あの拳銃は一体」

「まず拳銃に聖書の言葉を刻みました」

彼はそれを受けて説明をはじめた。

第六章

「聖書のか」

「邪悪な妖精は魔物と同じです。聖書の言葉を嫌います」

これは昔からよく言われていることである。邪な存在は聖書や信仰を嫌う。キリスト教の世界においては広く信じられている話である。

「そのうえで銀の十字架を溶かしまして」

「ああ、そこから先はわかる」

署長もここまで聞けば後はわかった。

「それを銃弾に使ったのだな」

「そうです、それで妖精を倒しました。こうでなくては倒せませんので」

「狼男と同じだな」

副署長はその話を聞いてふと呟いた。

「魔物はどれも同じだということか。それにしても」

「何でしょうか」

「うむ、私も知りたいことがあるのだがね」

副署長はここで怪訝な目で彼に問うてきた。

「このレッドキャップだが」

「はい」

「何故人を殺すのかね。ただの快樂殺人からかね？」

「生きがいの為です」

男の返答はこうであった。

「生きがい!?!」

「はい、この帽子を御覧下さい」

そうしてレッドキャップの帽子を指差す。その奇麗に赤く染まった帽子を。

「レッドキャップの生きがいはこの帽子を赤くすることなのです」

「帽子をか」

「そうです。この赤ですが」

「血か」

副署長はその赤を見て言った。その赤は確かに血の赤であった。

「それで帽子を染め上げているのか」

「レッドキャップにとって帽子をより赤くすることが生きがいなのです」

それを今副署長に述べる。

「だから人を殺し」

「そうしてその血で帽子を赤く染めるのか」

「これでおわかりでしょうか」

ここまで話したうえで副署長に対して問うた。

「どうして彼が人を殺すのか。その斧で」

「ああ、よくな」

副署長もそこまで聞いて納得した顔で頷いた。

「気持ちのいい話ではないがな」

「それは我々が人だからです」

ここでの男の言葉はあえて人であることを強調するものであった。

「妖精は妖精で違う考えをするものです」

「特に邪な妖精はか」

「そうなります」

署長にも述べる。

「おわかりになって頂けたでしょうか」

「わかった。しかしだ」

署長は顔を少し上げて溜息をついた。溜息はすぐに白い息となって出た。

「殺された犠牲者にとっては納得できない話だな」

「全くです」

副署長も署長の言葉に伝えて頷く。

「ただ帽子を赤く染める為だけに殺されるというのは。しかも千年

も前からそれが続いていたとは」

「レッドキャップはそもそも血を好みます」

男はまたレッドキャップについて言及した。

「過去に事故や事件のあった場所に現われます。そして犠牲者を狙うのです」

「ではそこに立ち寄った者にも責任があるというのかね」

「そうは言いません」

男はそれを否定する。

「それはあまりにも理不尽です。過去に何があったとはいえ今には関係がないのですから」

「そうだな。しかし」

「はい、それも妖精にとっては関係のないこと」

男が言いたいのはそれであつた。

「妖精には妖精の決まりがありますし」

「それもまた理不尽だな」

副署長はその言葉を聞いて顔を顰めさせた。

「それで殺されるのもまた」

「確かにそうですがそもそも世の中とは理不尽なもの」

男の言葉は今度は哲学的になつた。

「ですからそうしたこともあるのです」

「理不尽な中での事件か」

署長はそこまで聞いてまた白い息と共に呟いた。

「何かな。それを言うと」

「はい、どうしようもありませんが」

「しかし事件は解決されねばなりません」

副署長も言ったところで男が述べた。

「その理不尽をできる限りなくさなければ」

「それが我々の仕事か」

「その通りです。少しでも」

男はそう呟く。彼の呟きもまた白い息になっていた。その息の下

でレッドキャップの軀は崩れていき最後には白い砂になって乾いた風により消し去られた。

一連の殺人事件は終わった。表向きには犯人は自殺し死体は川の中に流れて発見されなかったと発表された。しかし真実は限られたものしか知らなかった。公表しても誰も信じないものだったからだ。だからこそありのままには公表されなかった。そうした事件であった。

赤い帽子 完

2007・12・1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6023d/>

赤い帽子

2009年3月24日11時02分発行